

## 金田一春彦先生を偲んで

秋 永 一 枝

正式の学生として講筵に列したことがない私が今金田一先生の追悼文を書くことに、多少のためらいがないでもない。然し先生は、ご自身のアクセント観を説く相手に譜代も外様もなかったのである。その点で私は東大・上智大・早大の異なる三講義を聞かせて頂くことができ真に有難かった。

初めて先生にお目にかかったのは早稲田を卒業してすぐ、京助先生編纂の『辞海』のアクセント注記に携わった昭和26(1951)年夏頃である。次いで春彦先生編の『明解古語辞典』(初版昭和28年刊)の校正の下働きへと続き、それが延々『新明解古語辞典』まで続いたのだった。

その頃先生は、女が学問し仕事を続けることがあまりお好きではなかったが、東京アクセントの調査に走り回っている私に呆れられてか、東大の講義の末席に連なることをお許し下さった。先生の御講義は、時にアクセントに忠実な曲がつけられた歌を歌われたり、学生を飽きさせないように心配りがされることもあるが、方言アクセント変化のあたりはなかなか付いていけない難解なものだった。

特に昭和26年12月の国語学会発表の「東西両アクセントのちがいができるまで」(後に「文学」22巻8号に掲載)は東京式アクセントが京阪式アクセントから変化してきたものだという新発見で現在ではほぼ定説となっている画期的なものだったが、多くの学生の理解は未だしとってよかった。

昭和51年度早稲田の大学院の御講義は『国語アクセントの史的研究 原理と方法』(昭和49.3刊)の前半が中心で、それに平家正節が加わり、平曲の講義の時はよく「堯の代の民は堯の心の直なるを以て」と語られた。この時の院生では川岸敬子・久島茂・細川英雄の諸氏が、学生では上野和昭氏がいた。時々「これはどうしてか分かりますか」などと御下問があり、肝を冷やした事だった。

その後58(1983)年の上智大の講義は方言アクセントで、上野氏・坂本清恵氏と共に通ったが、この席には院生の前川喜久雄氏の姿もあった。

それ以前、昭和57(1982)年から三年間、先生は国語学会代表理事をつとめられ、わたしが庶務主任、金水敏氏、後に古田啓氏、近藤泰弘氏、後に坂本清恵氏が庶務委員となった。何しろ、代表理事・庶務主任ともに計算に弱く、予算・決算などすっかり庶務委員に助けてもらった。

57年秋に、先生は国語学会創立40周年記念事業として「国語学研究文献索引」の作成を提案され58年には理事会を通り、国立国語研究所と共同の形で大がかりな作業が始まった。「国語学」137号には、先生の「国語学会四十周年を迎えて」がある。何しろ論文数10万件余を入力し、キーワードをつけ、シソーラスをつくり、フロッピーに収録するという作業である。その後『国語学研究文献索引 音韻篇』（編集まとめ、秋永・坂本・鈴木豊）が平成6（1994）年2月に、『同 国語史篇』が平成8年（1996）年2月に刊行され、あとはCD-ROM版で公開の形となり、先生の夢の一つが実現したわけである。先生もこの頃はお元気で委員会にも毎回出席しておいでだった。

驚くべきはそのお忙しい中を中国への御出講、九大での集中講義や国内各地での御講演、更にテレビ出演などをなされ、その間に『十五夜お月さん 本居長世 人と作品』（昭57.12）を上梓され、文部省芸術選賞、毎日出版文化賞、日本児童文学界賞を受賞されておられる。先生は講演旅行が大のお好きで、「ちっとも苦にならない」とおっしゃっていた。御旅行先で、ちょっちょつとアクセントなどをお調べになるのも楽しみのお一つようだった。

上智大を御退職の後には以前にも増して平曲研究にとり組まれ、また平曲譜を残しておきたいという執念が、御年84歳にして『平曲考』という大冊を刊行させた。平曲譜や五線譜が入っている校正刷に遠慮なく朱を入れられるので、当時この出版を担当されていた倉島節尚氏は頭をかかえておられた。その『平曲考』がきっかけで平成9（1997）年度の文化功労者として顕彰され、私がお祝いのお祝いの短文を「音声研究」（2巻1号）に記した。それを御覧下さった先生は「私の追悼号ができたようなものです」とおっしゃられ恐縮したことだった。

勿論この顕彰は『平曲考』のみにあるのではなく、先生の独自の日本語研究にある。例えば先生の名を冠することもないほど著名な「アクセントの類別語彙」の萌芽は東大文学部へ提出の卒業論文「国語アクセントの史的考察」（昭和12年3月）にあり、この完成版のようなものは前述の『国語アクセントの史的考察 原理と方法』にある。先生はごく最近まで、この下巻とも言うべき『実践と展開編』の作成に意欲を燃やしておられ、お誘いも頂いたが私などの力及ばぬところでお手伝いできず申し訳ないことだった。

私の最も影響を受けたのは『四座講式の研究——邦楽古曲の旋律による国語アクセント史の研究各論（一）——』（昭和39（1964）年3月）で、これの私家版（昭36年3月）で先生は文学博士を取得しておられる。『平曲考』はいわばその各論（二）に当たるといってよい。語の読み方を記した本のほうは「理論編」で、館山甲午氏から習った平曲を若い人に伝えたいと山梨の山荘などで熱心に教えられたのは「実践編」である。幸い、須田誠舟・広瀬圭穂・木原綾子の諸氏が習ってくれたと大層お喜びであった。十数年前山荘の近くで院生と合宿していた私がお伺いしたときも数人にお稽古されておいでだった。その先生お気

に入りのハヶ岳の山荘は二階から取りはずしのできる梯子で半坪ほどの屋根裏部屋に登ることができる。そこに座してはるか南アルプスの山々を望まれるのが何よりお好きのようだった。「先生お危のうございます」と見ている私がはらはらして申し上げても「いやダイジョブ、ダイジョブ」とお登りになる。またお若い頃、牧野富太郎博士の植物同好会に入られて草花の名を覚えられ大層おくわしかった。山荘の庭の片隅の何の変哲もない白い花を示されて、「むらさきですよ」とお教え下さったり、柳蘭の一株を抜いて下さったりした。植えかえたそれも私の手入れの悪いせいいかいつの間にか消えてしまい、大切な形見の残らないのが残念である。

皆さん口を揃えて先生はおやさしい方とおっしゃる。たしかに声を荒げて大声でお叱りになるようなことはなかったが、そのような時はいかにも不愉快だという顔をされるので、私どもはシマツタ、考えが足りなかった、などと震え上がったものである。

先生は晩年御蔵書を山荘近くの山梨県大泉村の図書館に寄贈され、現在「金田一春彦ことばの資料館」として一般に公開されている。夏には山荘から毎日のように通ってそこでお仕事をしておられたそうだ。

そのお気に入りの山荘で蜘蛛膜下出血をおこされ5月19日遂に大往生を遂げられた。御年満91歳。御自身がおつけになった戒名に御親交のあった導師が「大」の一字をお加えの「春光院細雨鳩鳴大居士」。お飼いになっていたジュズカケバトの声がお好きだったことによる。青山葬儀所での通夜のお経は『四座講式の研究』にもある「仏遺教経(ぶつゆいきょうぎょう)」だそうである。墓所はおみ足の怪我のあとお定めになったもので、多磨墓地の9区2種7側29番である。

現在先生の御著作の大部分は『金田一春彦著作集』(全12巻、別巻1)として玉川大学出版部より刊行中である。その目録からも分かるように、先生のお仕事は発音関係ばかりでなく文法論から、音楽関係、随筆など多様である。私は刊行委員の一人として、今見ることの難しいガリ版刷りのものから、戦争中の雑誌に御発表のものまで収録し、著作集に加えることとした。私の校正分担は秋からだが、せめて刊行の終りまで見届けて頂きたかったと思う。もう一つ、この数年お目にかかるたびに書き直したいと仰せの『『補忘記』の研究 続貂』の訂正原稿も遂にそのままとなってしまった。メモでも頂いておけばよかったと悔まれてならない。先生、申し訳ありませんでした。そして永い間先生の下で研究の方法と実践を教えて頂いたこと、本当に有難うございました。(2004.7.18)